平成２１年度入学式　学長式辞

愛媛大学長　柳澤　康信

本日ここに、平成２１年度入学式を挙行するにあたり、愛媛大学を代表して、皆さんの入学を心から歓迎いたします。全国各地から、そして、外国から、あわせて１，９７３名の若々しい皆さんを愛媛大学の新入生として迎えることができました。

この良き日のために、ご多用にもかかわりませずご臨席を賜りました、愛媛大学校友会・同窓会代表の皆様をはじめ、各方面のご来賓の皆様、愛媛大学名誉教授の先生方に厚くお礼申し上げます。また、ご列席いただいた入学生のご家族の皆様、関係の方々にも厚くお礼申し上げます。この良き日を迎えられ、お慶びもひとしおのことと存じます。心からお祝い申し上げます。

さて、新入生の皆さんはこれから愛媛大学での生活が始まります。皆さんの胸の中には大学生活に向けて、夢と希望が大きく膨らんでいると思います。大学での４年間、あるいは６年間は、皆さんが責任ある自立した社会人となるために、自分の生き方を見つめ、真の自分を発見し、生きる力を身につけるためのかけがえのない期間です。大学での日々の過ごし方によって、皆さんの将来は大きく違ってきます。皆さんがいま心に感じている初々しい緊張感をこれからもずっと忘れずに、有意義な大学生活を送ってもらいたいと思います。

愛媛大学は、昭和２４年に新制国立大学となって今年でちょうど６０周年を迎えます。この間に愛媛大学は着実に発展し、世界的な学術研究拠点としてのみならず、地域の教育研究の拠点として、地域を支える人材の育成、学術や文化創造の中心的な役割を果たしてきました。

５年前の平成１６年に国立大学法人として再出発いたしましたが、新たに制定した「愛媛大学憲章」において、「学生中心の大学」「地域にあって輝く大学」の実現を目指すことを宣言しました。その理念の下で、これまで教育・研究・社会貢献においてさまざまな先進的な取組を行ってきました。そして、その実績は地域社会や他の大学などからも高く評価されるようになっています。

大学の最も重要な社会的役割は、皆さんのような次世代を担う若い人材を育成し、社会に送り出すことにあります。愛媛大学では、「学生中心の大学づくり」の中核となる全学組

織「教育・学生支援機構」を設置したり、教育改革を中心的に担う教育コーディネーターを導入したりして、全学が一丸となって教育改革を推進しています。学習する側の視点に立って、授業・カリキュラムの改善を着実に実現し、すべての学生が卒業するまでに、自立した個人として人生を生きていくのに必要な能力を習得することに最大限の努力をはらっています。

研究面では、世界レベルの３つの研究センターを有しているところに愛媛大学の特色があります。沿岸環境科学研究センターと地球深部ダイナミクス研究センターが中心となったプロジェクトは、それぞれ平成１９年度、２０年度に文部科学省の「グローバルCOEプログラム」に採択されました。また、無細胞生命科学工学研究センターのプロジェクトは、総合科学技術会議により「今後の推進すべき我が国の戦略的技術開発」の一つに選定されています。これらの実績は地方大学として傑出しているといえます。愛媛大学は、「先見性や独創性のある研究グループを組織的に支援し、世界レベルの研究拠点形成を目指す」ことを基本方針としていますが、この方針に沿った取組が今日実を結んでいるといえます。

また、愛媛大学は、地域にある大学として、地域の発展を牽引する人材の育成と地域の発展を支える学術研究の推進もきわめて重要な使命だと考えています。昨年度に設置した南予水産研究センター、県内各地の自治体・企業・市民との連携を緊密にするためのサテライト・オフィス、産業界からの要請によって開設した大学院特別教育コースなど、地域連携の質は確実に上がっています。地方が疲弊していると言われる今日、産業・文化・教育・医療など多くの分野で地域に貢献し、地域から信頼される大学になることがきわめて重要です。幸い、最近では、地域の人々から「愛媛大学が身近に感じられるようになった」「地元において存在感が増している」などという声をよく聞くようになっています。

もちろんまだ十分とは言えませんが、愛媛大学は教育・研究・社会貢献いずれにおいても成果を上げ、未来に向かって発展しつつある大学であると言えます。「学生中心の大学」「地域にあって輝く大学」を作るという基本方針が少しずつ実現しつつあることを実感しています。新入生の皆さんは、このような愛媛大学に入学したことに誇りを感じて、胸を張って大学生活をスタートしてもらいたいと思います。

さて、皆さんは大学でどんな能力を身につけようと思っていますか。ここで少し立ち止まって、大学で学ぶ意義を考えてもらいたいと思います。

愛媛大学では、昨年、各学部のディプロマ・ポリシーを定めました。まだ聞き慣れない言葉かもしれませんが、ディプロマ・ポリシーとは「学生が卒業時に身につけていなけれ

ばならない能力」を示した達成目標のことです。すなわち、大学の学位を授与されるためには、最低限どのような能力の修得が必要であるかを示したものです。このディプロマ・ポリシーは各学部の履修案内や大学のホームページで見ることができますので、ぜひ一度は自分の学部・学科のディプロマ・ポリシーに目を通してください。

言うまでもなく、大学では、どの学問分野であっても、まず知識を獲得することが求められます。どの学問分野でも、そこには長い間に人類が行ってきた研究や実践や思索によって歴史的に蓄積されてきた知識の体系があります。ですから、自分の選んだ専門分野については「知識の体系」という深い森に分け入る必要があります。そこでは、深さを追求する体系立った学びが求められます。深い学びとは、新しい知識をどのようにして創造するか、そのために必要とされる基礎的な知識は何か、さらにどのような方法で真実に到達できるのかなどを学ぶことも含んでいます。しかし、それだけでは十分とは言えません。それと同時に、視野を広げるために幅広い知識を獲得することも大切です。この深さと広さを兼ね備えた人を、Ｔ字型人間と呼ぶことがあります。アルファベットの大文字のＴです。Ｔの横棒が視野の広さを、縦棒が専門の深さを示します。今日の社会では、個々の知識はすぐに古くなり陳腐化するので、必要な時に学び直さなければなりません。一生、勉強することが求められます。専門的な知識と幅広い知識によって全体を俯瞰する能力があれば、社会人になってからも必要なときに主体的に学ぶことができます。

もうひとつ、ぜひとも皆さんに大学時代に高めてもらいたい能力は、人間関係を構築する能力、すなわち、集団の中でうまくやっていける能力です。今の若い人はとかく少数の人とだけつき合い、しかも、密な人間関係を避ける傾向にあります。そして、多くの若者は自分は友達を作るのが苦手だと感じています。これは、家族やごく限られた人だけと緊密な人間関係を結びながら成長してきたという現代の社会システムのあり方に原因がありそうです。

私の専門は行動生態学という分野で、動物の行動を研究していますが、人間の行動にも関心があります。「人間の脳はなぜ大きくなったのか？その原因は何であるのか？」これは誰にとっても興味のある問いです。３０年ほど前までは、「人間は道具を作るようになったから脳が発達した」とか「狩りをするようになったから脳が大きくなった」という説が有力でしたが、今日では人類学者の多くは、「人間は社会的動物であるがゆえに脳が大きくなった」と考えています。

人類の祖先は何十万年の間ずっと群れで生活してきました。群れの内部には、「仲良し

組」が形成され、群れの他の個体とけんかするときなどに「仲良し組」は互いに助け合い、力の弱い個体でも仲間の力を借りて、強い個体を打ち負かすことができました。そのため、群れの他の個体と上手に関係を結んだり、他の個体の行動を正確に予測したりする者が進化的に有利になったと考えられています。そのための膨大な情報を処理する必要が生じたために脳が発達した。そのような考え方です。

もし、そうだとすると、「人間関係を構築する能力」は人間にとってきわめて基本的で、かつ本質的な能力ということになります。企業アンケートなどで企業が新入社員に求める能力のうちで常に上位に挙げられるのが、コミュニケーション能力や協調性やリーダーシップなどですが、これらの能力はいずれも、人間関係を構築することに関連した能力です。これらの能力は、潜在的には誰もがもっているけれど、しかしそれを発揮する経験が少ないと十分に発達しない能力であると言えます。

前置きが長くなってしまいましたが、私が皆さんに勧めたいのは、「人間関係を構築する能力」を高めるための機会を積極的に作ることです。具体的には、体育系サークル、文化系サークル、あるいは、ボランティア・サークル、ＮＰＯなど学内あるいは学外の組織に参加することです。愛媛大学にはさまざまなタイプの団体や組織がありますが、少なくともその１つに加入して、先輩や同輩そして教職員と一緒に活動する場を確保してください。そして、その中でコミュニケーション能力や協調性やリーダーシップの能力を磨いてください。

あえてこのようなお願いをするのは、最近、孤立しがちな学生が増え、メンタル面でも問題を抱えている学生が増えているからです。「人間は社会的動物であること」「人間はひとりだけでは生きて行けないこと」を肝に銘じて、大学生活の第一歩として、仲間作りや友人作りに取り組んでもらいたいと思います。

皆さんのこれからの大学生活が充実したものになることを心から願い、式辞といたします。